文民統制の危機

たまたま『文藝春秋』11 月号を見ていると、表題の評論家・立花隆「日本再生・54」に注目した。同感するところも多く重要な問題なので、要約しておきたい。その前に、関連する写真を 3 枚載せておく。左から順に中日新聞 9 月 17 日夕刊、朝日新聞 18 日朝刊、毎日新聞 18 日朝刊による。あまり見たくもない写真だが。

唖然とした。何なんだこれは、と思った。あっけにとられて、しばらくテレビ実況に見入った。何を唖然としたのかというと、あの決定過程だ。野党から平和安全法制特別委の鴻池委員長に対して不信任動議が出された。その採決をする間、委員長職が鴻池氏から自民党の筆頭理事たる佐藤正久議員（かつてのイラク派遣自衛隊のヒゲの隊長）にゆずり渡された。

しばらくして不信任動議が否決されると、鴻池委員長が委員長席に復帰した。その瞬間だった。強行採決劇が一挙に進行した。突如屈強な一群の若手自民党議員団が入ってきたかと思うと、アッという間に委員長席周辺を取り囲んだ。そのただならぬ様子にいよいよと察知した野党議員たちがドッとかけつけた。たちまち両陣営が入り合い、殴る蹴るの乱闘シーンがあちこちで繰り広げられた。怒号が飛びかう中、いつのまにか議場の一角に移動していたヒゲの隊長が手を何度か上下に振ると、それに合わせて与党議員たちが一斉に立ったり座ったりを繰り返した。声がちゃんと収録されていなかったので、テレビを見ている人には何が起きているのかさっぱりわからない。

聴取不能のわずか 8 分間のうちに、あわせて 11 本の安保関連法案の採決が全部終わっていた（と自民党は主張し、野党は無効を主張している）。まるで、見物人の気が一瞬そがれた隙にすべてが終わってしまう高等手品のような法案さばきだった。この間何といっても目立ったのは、議場の一角から全体の指揮をとっていたヒゲの隊長の采配ぶりである。その見事な統率力と采配ぶりに感心もしたが、同時になんじゃこれはと思った。こんなことが許されていいのだろうかと思った。

各紙の報道を合わせると、ヒゲの隊長らは防衛大学校の年中行事・開校祭の棒倒し合戦を参考に相当の時間をかけて、策を練り、シミュレーションと練習を重ねた上で本番に臨んだという。ヒゲの隊長は正真正銘の軍人（自衛官）出身の政治家である。元軍人が国会の議場の一角に陣取って、議員たちを右から左に自由に動かしていたのである。そして、”軍”の将来のために必要とされる法律案を無理やり通してしまったのだ。これ

ほどの無茶苦茶は、昭和戦前期の議会で政党政治がテロで一瞬に瓦解し、軍の専横時代を全面的に開花させたあの時代ですら行われなかったことだ。

悪夢を見る思いだった。軍がかかわる最重要の国策変更を、元軍人が前面に出て現場指揮を執ることで一挙に強行突破で片付けてしまったのだ。それもわずか 8 分で。この場面を見ていてつくづく感じたのは、軍という組織が持つ圧倒的な行動力と組織力である。あれを見て、軍が中心になって行動すれば、クーデタなんかすぐにできると思った。戦後、憲法 9 条によってそもそも軍を持たない国家になった日本では、シビリアンコントロールの問題が真剣な議論の対象になることはなかった。軍の暴走を防ぐシビリアンコントロールが重要という考えが、日本人の頭から抜け落ちていった。

そしてついに今年 6 月、形式的には保たれていたその最後のかすがいも、日本の社会から外れてしまった。防衛省設置法の改正という形で、防衛省における背広組（内局官僚）の制服組（自衛官）に対する優位性原則（どちらがどちらのいうことを聞かねばならないか）が取り払われてしまったのだ。いまでは、背広組と制服組は完全に同列化した。

そこに起きたのが今回の安保法案にまつわる事態である。その強行採決である。その現場をしきったのが、ヒゲの隊長だった。日本は制服組がいつでも先頭に立って国政を仕切ることが可能な国家になってしまっているということを誰の目にも明らかにした事態だった。

シビリアンコントロールがなくなった軍隊はいとも簡単にクーデタを起こすことができるというのが、世界の歴史が教えるところだ。それを杞憂というなら、万が一にも杞憂を起こさせない制度的保障を一刻も早く作り直すべきだと私は思う。

（2015 年 10 月 28 日）